

スリランカの仏教研究事情

柏原 信行

現在、スリランカには次の九校の国立大学がある。即ち、コロンボ大学(University of Colombo)、『ペーラーデニヤ大学(University of Peradeniya)』、『キャラニヤ大学(University of Kelaniya)』、『スリ・ジャヤワルダナプラ大学(University of Sri Jayawardene-pura)』、『ジャフナ大学(University of Jaffna)』、『モラトゥワ大学(University of Moratuwa)』、『ルフナ大学(Ruhuna University)』、『ペーリ・仏教大学(Pali and Buddhist University)』、『開放大学(Open University)』である。

これらのうち、ペーリ・仏教大学と開放大学は、いずれも日本での通信教育の如く大学本部は事務所程度のものであり、実際の教育は地方の教育機関やピリウエナ(僧院学校であるが在家者の子弟の教育も行なう)に於いて行なわれている。

仏教学関係の授業は、ペーリ・仏教大学の他、ペーリ語のコースがキャラニヤ大学とペーラーデニヤ大学に、仏教学(Buddhist Studies) コースがキャラニヤ大学とペーラーデニヤ大学とスリ・ジャヤワルダナプラ大学にあり、キャラニヤ大学には、この他、仏教文化(Buddhist Civilization)と仏教哲学(Buddhist Philo-

sophy)のコースがある。ペーリ・仏教大学では、仏教思想研究、仏教比較研究、仏教修行研究、仏教美術及び考古学、シンハラ語学及び文学、ペーリ語学及び文学、サンスクリット語学及び文学の各コースが設けられ、初期仏教、仏教倫理学、仏教心理学、仏教論理学及び認識論、アビダルマと部派仏教、大乘仏教思想、仏教文化、仏教儀式、仏教美術及び考古学、仏教社会哲学、仏教文化史、仏教における人の概念、仏教社会学及び民俗学、仏教教育学、仏教と政治経済哲学、仏教と現代社会の諸問題、仏教と社会哲学、仏教と現代宗教、仏教と現代哲学の諸問題、仏教と現代科学、仏教僧院生活の起源と組織、僧院内の規律と教育、僧院内の法律と裁判、僧院の美術、僧院制度の比較研究、仏教美術の基礎概念、仏教美術の展望と変革、考古学の原則と方法、仏教考古学の歴史、碑文と古代貨幣、ペーリ語の文法・翻訳・作文・言語学・文学・文学史、梵語の文法・翻訳・作文・言語学・文学、シンハラ語の文法・言語学・文学・文学史・碑文・古文書学、プラークリットの文法・翻訳・文学。以上の授業が用意されている。

ペーリ・仏教大学は一九八三年一月の開校で未だ日も浅く、前述の如く実際の授業は、各地の僧院学校のものが充当されるので、完全には充実してはいない。開校当初は大学院は開設されてはいなかったが、一九八四年度より、新たに修士課程を設けている。これは主に留学生のためのものであり、期間も一年間で終了し、特に授業はせず、指導教授の個人指導の下に論文を書けば修士号を与えるというものである。

一般の大学では、パリー語と仏教学関係のコースは、人文学

部 (Faculty of Humanities) の中のパリー・仏教学科 (Department of Pali and Buddhist Studies) に属しているが、人文学部には、この他、梵語コースがジャフナ大学、キャラニヤ大学、スリ・ジャワラダナプラ大学にある。梵語コースでは梵語仏典は扱われず、主にヴェーダ関係のものが研究される。また、ヒンドゥー文明のコースがジャフナ大学とキャラニヤ大学にある。その他、語学関係では、シンハラ語コースはジャフナ大学とモラトゥワ大学以外に、タミル語コースはモラトゥワ大学とルフナ大学以外にあり、英語コースはモラトゥワ、スリ・ジャワラダナプラ、ルフナの各大学以外にあり、キャラニヤ大学には、この他、独語・仏語の他、言語学コースと共に、ヒンディー語、中国語、日本語のコースも設けられている。

さて、実際の授業内容は、筆者が大学院博士課程 (Postgraduate Ph. D. Course) に一九八二年から八四年にかけて在籍したキャラニヤ大学のパリー・仏教学部では、左記の通りであった。

主任教授であり、筆者が師事した Y・S・カルナーダーサ教授 (Karnadasa) は、論事 (Kathavattu) と仏教思想、藏外文献における仏教教理、仏教思想史、俱舍論梵本を、前主任教授であり当仏教学セミナーの前号にその講演原稿が翻訳掲載された N・A・ジャヤウィクラマ教授 (Jayawickrama) は、パリー語文法・言語学・翻訳・作文、律蔵の小品 (Culla-vagga)、中部 (Majjhima-Nikaya)、経集 (Suttanipata)、アショーカ王碑文、

ジャイナ教聖典中の上静慮経 (Uttarādhyaṇa sūtra) を、オリヴァー・アベーナヤカ (Oliver Abeynayaka) 教授が、律蔵大品 (Maha-vagga) の大鍵度 (Mahakkhandaka)、長老尼偈 (Therīgāthā)、パリー文学史を、ハンウアッラ・カルヤーナワンサ師 (Hemvella Kalyanawansa) が、パリー語文法・翻訳・作文、長部 (Dīgha-Nikāya)、普曜経 (Lalitavistara)、妙法蓮華経 (Saddharma-puṇḍarīka sūtra)、八千頌般若 (Aṣṭasāhasrikā-Prajāparimitā) を、スタルマ・パンディタ教授 (Sudhama Pandita) が、パリー古文書、相応部 (Sāmyutta-Nikāya)、増支部 (Aṅguttara-Nikāya)、パリー文学史を、ティラク・カールワワンサム教授 (Tilak Karyawansam) が、仏教文化を、ロートゥンバ・ウペーリ師 (Rotumba Upali) が、仏教史の起源・歴史、仏教における智を、H・S・クレー (Cooray) が、初期仏教ニカヤの教義、仏教の比較研究、仏教儀式を、アーナンダ・ウィジャヤラトナ (Ananda Wijayarata) が、仏教教義概論を講義している。さて次に、各大学等に所属する学者と、彼らの研究について紹介しよう。

キャラニヤ大学の上述の学者のうち、カルナーダーサ教授は仏教哲学を専門とし、『色の仏教的分析』(『Buddhist Analysis of Matter』) を一九六七年に著し、近時は漢訳仏典も読み始めた。ジャヤウィクラマ教授はパリー文学、文法、インド・アーリアンの言語学に勝れ「経集の段階的發展の実証と分析」を一九四七年に発表している。最近では、アショーカ王碑文に取り組んでいることは、授業や前号掲載の教授の原稿によっても明らか

であろう。アペーナーヤカ教授はペーリ文学、特に小部 (Khuṇḍaka Nikāya) に詳しい。クレーは一九六四年「仏教文献における九分の発生と発展」を発表し、中観哲学を手がける。その他、W・J・カルナーラトナ (Karnarāṇa) は仏教哲学、論理学、認識論、大乘仏教と手広く手がけ、「仏教の因の定理」の論文がある。また、M・M・J・マラーシンハ (Maraśingha) は一九六七年「初期仏教における神々」を発表し、仏教社会学の研究に移り、現在は各仏教国での仏教と民間信仰の融合に注目している。G・バーナボッケー (Banbōkē) は古代仏教徒の活動と遺跡に注目し、「セイロンのサンガの僧院の規律の展開と歴史」を一九六九年に発表した。M・W・P・シルワー教授 (Silva) は仏教心理学を専門とする。R・D・グナラトナ (Gunarāṇa) は仏教を科学的態度で眺め、仏教の科学性を探る。K・ヴァジラ (Vajira) はスリランカの仏教文化を研究し、仏歯に関する歴史と文化についての論文がある。カーリヤワサムは仏陀についての説出世部の説について研究する。カルヤーナワンサは撰阿毘達磨義論の注 (Abhidhammatā-vibhavin) のシンハラ語訳を進めている。そして、キャラニヤ大学名誉学長のワルポーラ・ラーフラ (Walpola Rahula) は一九五六年初版の『セイロン仏教史』(『History of Buddhism in Ceylon』) で殊に有名である。次に、ペーラーデニヤ大学には、一九六六年に長部の注釈書 (Uṇāthavāṇanā) を校訂したリリー・ダ・シルワー女史 (Lily de Silva) がある。彼女は一九八一年には最近のペリッタについての研究成果をまとめ、国立博物館の紀要 (Spolia Zeylanica)

の第三十六巻第一号として出版している。K・アーリヤセーナ (Ariyaseṇa) は仏教の社会思想を研究し、R・M・M・ハンドゥルカンダ (Handurukanda) と R・A・グナティラカ (Gunatiaka) は梵語と西蔵語の比較研究に入っている。Y・ダンマペーラ (Dhammapala) はペーリテキストを広く研究し、一九七〇年に「ペーリ註釈書における文法的特色の分析」を発表した。また、同ペーラーデニヤ大学哲学科の P・D・プレーマシリ (Premaśiri) は仏教的立場で倫理学を考察し、G・ダルマシリ (Dharmaśiri) はキリスト教の神の概念に対する仏教からの批判をとりあげる。次に、スリ・ジャヤワルダナプララ大学では、C・W・ワンダラー (Wandara) が宗教社会学として仏教文化を捉えている。当大学のシンハラ語学科にある G・ダンマペーラ教授は「十一、二世紀シンハラ文化比較研究」を一九七三年に発表しているが、本年(一九八四年)暮に訪日とのことである。

人文学部の大学院 (Post-graduate Course) はペーリがキャラニヤ、ペーラーデニヤ、スリ・ジャヤワルダナプララ大学に、梵語がペーラーデニヤ、スリ・ジャヤワルダナプラ、ジャフナ大学に、仏教がキャラニヤ、ペーラーデニヤ、スリ・ジャヤワルダナプララ大学に、ヒンドゥー文化がジャフナ大学に、それぞれ設けられ、各大学所属の教授達の指導を受けることになる。これらのコースとは別に、仏教学研究所 (Post-graduate Institute of Buddhist Studies) がキャラニヤ大学内に設置され、仏教資料・仏教文化・仏教思想の三つのコースが用意されている。これも、大学院相当の扱いを受け、研究生は当研究所所属の教官

の指導を受ける。この研究所は一九八四年度より、キャラニヤ大学からコロンボ大学に移された。ここを代表する学者にはL・P・N・ペレーラーがある。彼の代表的論文には一九七三年の「律蔵に反映した古代インドの性——初期上座部僧院の規律の記録の性的特徴の資料を社会文化的に評価して——」がある。パーリ・仏教大学には特定の教授はいないが、キャラニヤ大学から学長として移ったK・アヌルッダはパーリ文献と共に仏教社会思想に詳しく、経典類に通じている。

一方、大学を離れ、仏教百科辞典の編纂長となったD・J・ディーラセーカラ (Dhirasekera) は一九六四年「仏教僧院の規律——経・律蔵との関連におけるその起源と展開——」を発表している。

大学以外では、この他にもカソリック神父A・ピールス(Pieles)は注釈家ダンマパーラについて研究している。その他にも多くの出家・在家の学者があつて、学問的或いは一般向きの多くの仏教書を出している。

筆者の知る若手の学者としては、先ず本学に留学し現在大智度論の研究に努めるU・スマンガラ師(Sumanasara)があり、また駒沢大学大学院にはキャラニヤ大学で講師を勤めていたA・スマナサーラ師(Sumanasara)があつて道元の著作を読む。また、仏教学研究所には一九八二年に僧院の経営学をテーマに修士論文を著したソーマランシ師(Somtransi)がある。八年に互つてスリランカに滞在し、比丘と共にパーリ・シンハラを修めて精通し、一九八三年、布施についての修士論文を書き上げた

遠藤敏一氏や、修士論文として入阿毘達磨論を英訳・注解したマレーシアからの中国僧、ダンマジョーティ師も仏教研究所に所属する。

学術雑誌は、キャラニヤ大学からカルヤーニー(KALYANI, Journal of Humanities & Social sciences of the University of Kelaniya)が、コロンボ大学からはコロンボ大学紀要(University of Colombo Review)がある。

スリランカでは大学での研究活動以外に、民間の仏教教育が盛んである。仏教徒子弟の学校教育に取り入れられているのみならず、Y・M・B・A (Young Men's Buddhist Association) や仏教出版協会(Buddhist Publication Society)が成人のための講座を開いたり、小冊子を頒布したりしている。シンハラ語ラジオ放送では朝夕のピリットや法話、仏教対談を放送する他、毎週土曜日の朝には仏教教義のクイズ番組がある。この様に、現在の仏教研究を支える基盤は政府の協力の下に強靱であると言えよう。

現在、活躍している学者は殆んど西欧的な研究方法を身につけている。ジャヤウィクラマ教授はG・P・マララセーカラ(Malasekera)の指導を受けた。マララセーカラはリス・デヴィツ夫人に師事した。カルナーダーサ教授もジャヤウィクラマ教授の下に英国流の研究方法を受け継ぎ、英国留学によりこの方法を築き上げている。他にも同様の学者が見られる。

元来、スリランカの仏教研究はシンハラ語によってなされてきた。各種の仏典の逐語訳(samaya)がなされていたのが、欧

州の学者による新しい研究方法を迎えた。

しかるに、スリランカにおける仏教研究は新たな局面を迎えていると言える。政府による仏教教団の保護により、スリランカ仏教学界の関心は教団へも向けられている。そして、仏教研究は仏典とその教義をテーマにするものと共に教団のあり方に関与するものも多く見られることになっている。

次に、先の学者のもの以外のインド学・仏教学関係の修士論文と博士論文の標題（一九四四～一九八二）を掲げ、スリランカにおける仏教研究の様相を示す一助としたい。

先ず海外で取得された博士論文では、仏歯の祭祠、初期大乘における仏教哲学の発展とパーリ・ニカーヤ、十五～六世のセイロン仏教研究、Sathawahana 支配下のデカン北部の仏教、初期仏教における心の概念、セイロンの初期仏教史書、セイロンの一二〇〇～一四〇〇年頃の仏教僧伽、十世紀以前のセイロンにおけるヒンドゥイズムと大乘仏教の歴史、仏歯儀式と政治的意義、叙事詩とプラナーナ期の南インドとセイロンのシヅ信仰、Vākya-padīya に表われたバルトリハリの言語学的理解、タミル語への梵語の影響の観点から見た Cīrakaṅgamani の研究、梵語文献における Parasurama, Amavatura の構文研究。

国内では、パーリ文献中の仏陀の概念の発展、初期仏教とバガブッドギーターとの比較、ポロンナルワの仏教建築、仏教文献中のジャイナ教、初期仏教の心理学的基礎に関連した情緒教育の理論と方法、初期パーリ文献中の奇跡の役割と信の問題、戒壇の歴史的発展、Atharvaveda 中の Yama の概念の発展と

Kaṭi, Dharmā の概念との関連、ラーマヤナに反映した古代インドの社会状況、十一～十六世紀上座部諸国間の交流、Abhidharma-samuccaya の英訳と重要術語解説、Pś-veda における在家者の指導力、シンハラ語に残る梵語文学と梵語の影響、Māgha の侵入とポルトガル人來航（一二二五～一五〇五）の僧伽の制度と Mahāsāmi (Sangarāja) の地位、梵語散文の起源と発展、これら英文論文の他、シンハラ語のものに、Kudusikha-padarta 校訂とスリランカの律の文献研究、Rajavaliya 校訂、一二三五年以降のセイロンのブロンズ製仏像、などがある。

スリランカの修士論文は非常に程度の高いものを要求される。通常大学講師等によって取得され、学科主任教授でも M. A. のみで Ph. D. を未だ取得しない者もある。さほど歴大な数ではないので、列举すると、

先ず、英文のものでは、初期仏教における帝釈、仏教・ヒンドゥイズムの哲学と梵語詩への応用、Nāgārjuna 時代（二七三九～一八一五）の仏教、学校における仏教教育、仏教における関係の哲学、スリランカの仏教建築の門、三～十世紀セイロンの仏教教育史、マハーバラタとジャータカと比較、古代セイロンの仏像堂、仏教哲学に基づく教育理論、ニカーヤにおける Pañña の分析、Nikāya-saṅgraha 校訂、サーンキヤ哲学教義と初期思想の基礎、セイロンにおける大乘の文献と建造物の痕跡、Lokopakaraya 校訂、ジャータカとマハーバラタの類似物語の比較、初期スリランカ詩における梵語 alankāra sastra の影響。また、シンハラ語では、三蔵に反映した仏陀

の生涯、スリランカの英国統治と仏教、シンハラ文献に表われた僧院生活、セイロンに於ける仏教の神知学運動とシンハラ語研究の復興、スリランカの仏教神知協会の教育活動の批判的研究、パーリ注釈書における文法的特色の分析、Pujavaliya §§ 17~25, §§ 26~34 校訂、シツダルタ、十一~十八世紀のスリランカとビルマとの文化交流、セイロンの民間信仰と占い、Nalāta-dhātuvansa 校訂、セイロンでのピリット読誦の起源と流布、Dharma sūtra と三蔵中との Dharmā-ni 比較研究、冥想の方法、ジャータカ群の比較研究、梵語文献における辞書編纂の起源と発展、Namarūpasamāsa 研究。

スリランカでは、大乘は絶えた為、上座部仏教研究は盛んであるが、大乘仏教研究は未だ発展してはいない。一九八二年暮れにアスラーダブラのジェータブナーラマから、九世紀の文字で般若経を記した七枚の見葉が出土した。コロンボ大学歴史学科でこれを解読し、現代シンハラ文字とローマナイズとによる刊本とする予定であったが、スリランカには未だ大乘仏教研究のための資料は非常に少なく、スリランカに先んじて、ドイツから Oskar von Hinüber によってローマナイズされたものが刊行された ("Sieben Gold Blätter einer Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā aus Anurādhapura" N. A. W. G. 1983 Nr. 7 pp. 189-207)。なお、黄金製貝葉については筆者が中外日報昭和59年4月11・13・16日号にその発掘状況を報告した。また、山口務氏の論文「スリランカ出土の Pañcaviṃśatisāhasrikā-Prajñāpāramitā について」が『仏教学研究』第十八号にある。

スリランカではパーリ聖典偏重のあまり、近時はシンハラ語の仏教書が顧みられなくなっている。却って、シカゴの Charles Hallisey 氏が Butsarānaya を研究する等、海外で研究が進められてゐる。

最後に筆者がスリランカにて戸惑った事を二、三点。シンハラ語はローマ字表記がパーリ語と異なる。+、中は共に th と表記され、tth は、+、d dh は dh' d dh が d とされる。これがパーリ語の表記にも屢々適用される。また ae と o の音が共に e の文字で表わされるので紛らわしい。大学図書館はシンハラ版の古書が開架式書架に並べられて手近かに取れるのに反し、P T S 版等が特別閲覧室に収められ且つ完備していない。パーリ語辞典は、パーリ語の碩学 A・P・ブッダダッタのコンサイスな辞典を誰も用いず、代って皆パーリ・シンハラ辞典、或いは英語の訳語を捜すなら P T S 版のパ英辞典である。我々の次元では、正確な訳語を求めようとするのであるが、彼らは、英国人による自然で適当な英訳語を求めるために、パ英辞典を用いているのであった。